

『長谷寺縁起文』 観音台座顕現譚成立の背景

——空海神泉苑請雨譚・如意宝珠龍王伝授説との関わりから——

藤 卷 和 宏

筆者は前稿「初瀬の龍穴とへ如意宝珠」——長谷寺縁起の展開・「十一山」をめぐる言説群との交差——⁽¹⁾で、複数の十一山縁起テクストと「長谷寺縁起文」「長谷寺密奏記」(以下、「縁起文」「密奏記」との関係論じた。両書は「十一山秘密記」からの影響が顕著であるが、それ以外の十一山縁起に拠らなければ作りがたい記述・設定も散見し、「縁起文」「密奏記」作者が複数の十一山縁起類を縁起作成の際に参看していたであろうことが想像される。小稿はこの問題について、空海の神泉苑請雨譚、および如意宝珠龍王伝授説に注目し、改めて考察を試みるものである。

一 「長谷寺縁起文」における

台座顕現譚の読み換え

十三世紀後半頃に成立したと考えられる「縁起文」は、長谷寺の本尊・十一面観音像の台座となるべき岩盤が、龍王の威力により地中から出現したことを次のように語っている。

奉^ル造^リ十一面観自在菩薩像^ヲ。高二丈六尺。(中略)而感^ニ応^シ時

至^リ、聖人合掌^シ、向^テ本尊^ニ發願^シ曰^ク、願^ハ得^テ冥助^ヲ、忝^ニ建^テ精舍^ヲ。其夜夢^ニ有^リ一^ニ金神^ヲ、指^シ示^シ北^ニ峯^ニ曰^ク、聖人莫^ク患^ハ慮^ス。檢^ニ峯^ニ地中^ニ、有^リ金剛宝盤石^ヲ。上^ニ地際^ニ齊^ニ、下^ニ輪際^ニ窮^ニ、其体^ニ在^リ三^ニ枝^ニ。枝頂^ニ大悲菩薩坐^シ、説法^ス。此^レ其^レ一^也。用^テ彼^レ可^ク為^ス金剛宝師子座^ト。元来未^レ宜^シ、頭^ヲ、機縁^ニ已^レ成^リ矣^ト。吾等神王部類^ノ八族^ノ、其^レ名^曰龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・伽樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・天神王等^一也。其龍神有^リ三^ニ八^ニ類^ト。謂^フ曰^ク難陀・婆素難・德叉伽・羯固吒・般摩・摩訶般摩・商佉婆羅・鳩利迦羅・天龍王等^一也。(中略)從^テ往昔^ニ以降^ニ、或^レ現^ニ本^ニ身^ニ、或^レ成^ニ童男^ト、擁^シ衛^シ此^レ山^ト、而^シ如^ク天^ノ普^ニ洽^ニ率^ニ土^ト、如^ク地^ノ厚^ニ願^ニ群^ニ生^ト。此^レ山^ノ興^ル、則^チ形^ニ而^シ振^テ威^ヲ、此^レ山^ノ衰^ル、則^チ幽^ニ而^シ成^ニ福^ト。夢^覺畢^ル。時天平元年己巳歲八月十五日、及^テ其^レ夜^ノ半^ニ、天^ノ風^吹峯^ト、龍^王製^シ電^ヲ、大雨時降^リ、成^ニ山^ノ崩^ニ石^ノ破^ニ之^音。心^肝不^レ安^ニ、纒^リ自^ニ窓^ノ間^ニ見^テ電^ノ輝^ヲ。天龍八部并^テ八^ニ大^ニ童子^ト等[、]摧^テ巖^ヲ掘^テ地^ヲ、不^レ幾^ニ、夜^ノ曉^ニ、現^レ見^テ北^ニ峯^ノ、平^ニ如^ク掌^ト。厥^レ岫^ノ險^中有^リ金剛宝盤石^ヲ。縱^ニ広^ニ正^ニ等[、]方^ノ八^ニ尺^ト也。其^レ面^又如^ク掌^ト。有^リ綾^ノ文^并菩^薩行^足穴^ト。新^レ像^御足^比技^ト。

敢無^{カシ}違^ヒ。

(傍線引用者。以下同)

観音像の完成後、徳道が精舎建立を願うと、夢中に「龍神」を筆頭とする天龍八部衆が現れ、台座の位置が示される。そして夢から覚めると、件の八部衆が八大童子とともに台座を掘り起こしているのを目の当たりにするのである。

前稿でも検討したが、この場面は、従来の長谷寺縁起にあつた台座顕現譚に新たな要素を加えて再構成されたものである。即ち、初期の長谷寺縁起群には、徳道の夢に現れた神が台座の在処を教えるというもの(三三三三)所収縁起の系統と、落雷により台座が掘り起こされるというもの(扶桑略記)所収第一縁起の系統との二類型が存しており、後には「建久御巡礼記」諸寺建立次第」所収縁起等、このふたつを併せたタイプも出現する。

堂舎構^{ノカ}ヲバ何^{ノカ}為^{ムト}思^フ間、夢^ニ二現^ル金^{ノカ}神^ニ、指^テ此^{ノカ}峯^ニ、聖人莫^シ慮^フ。檢^ル峯^{ノカ}地^ニ中^ニ有^ル盤^{ノカ}石^ニ。其^{ノカ}形^{ノカ}体^{ノカ}有^ル三^{ノカ}枝^ニ。々^々頂^{ノカ}每^ニ大^{ノカ}悲^ニ菩薩坐^フ。此^{ノカ}其^{ノカ}隨^ニ一^ニ也。以^テ之^ヲ為^ス彼^{ノカ}御^{ノカ}座^ニ。吾^ハハ彼^{ノカ}石^{ノカ}守^{ノカ}護^{ノカ}神也。徳道夢^{ノカ}覺^レ後、大^{ノカ}風^{ノカ}吹^レ峯^ニ、大^{ノカ}雨^{ノカ}時^{ノカ}降^ル。山^{ノカ}崩^レ石^{ノカ}破^レ不^レ幾^{ノカ}時^{ノカ}夜^{ノカ}曉^ス。見^ル山^{ノカ}峯^ニ、地^{ノカ}平^{ノカ}コト^{ノカ}如^ク掌^ニ。其^{ノカ}險^{ノカ}中^ニ有^ル宝^{ノカ}盤^ニ石^ニ。方^{ノカ}八^{ノカ}尺^ニ也。有^ル綾^{ノカ}文^ニ。又^ニ有^ル善^{ノカ}薩^{ノカ}御^{ノカ}足^{ノカ}穴^ニ。徳道^{ノカ}所^{ノカ}造^{ノカ}新^{ノカ}造^{ノカ}御^{ノカ}足^{ノカ}比^{ノカ}較^スル^ニ无^シ違^ヒ。

(諸寺建立次第)

そして、こうした複合型の顕現譚をさらに読み換えたのが「縁起文」である。「諸寺建立次第」で台座の守護神とされていた「金神」は、「縁起文」では「龍神」や「天神王」を含む「神王部類」であると、その属性が語られることになり、台座を掘り起こす場面では、その中の天龍八部衆が活躍する。

また、「諸寺建立次第」では「堂舎構^{ノカ}ヲバ何^{ノカ}為^{ムト}思^フ間」に神の夢告があつたとしており、「建久御巡礼記」でも同様、「堂ヲ構^ム難^ク叶^フ奉^ル立^テ尊^ニ像^ヲ難^ク叶^フ思^フ煩^ク之間」に夢告が下るといふ設定になつてゐる。台座の指示・顕現といふ冥助は、何らかの働きかけに対してではなく、偶然にもたらされたものなのだ(これらのテクストの中では、この偶然性こそが観音の靈験を称揚するものとして機能していると理解すべきであろう)。それに対して「縁起文」の方は、「合^シ掌^ニ向^テ本^{ノカ}尊^ニ發^ス願^シ曰^ク願^シ得^ル冥^{ノカ}助^ニ念^{ノカ}建^{ノカ}精^{ノカ}舎^ニ」と徳道が祈誓することにより暴風雨が起こり、八部衆も呼び寄せられ、その結果、台座が掘り起こされたと解釈することができる。つまり、徳道の祈誓といふ行為^{ノカ}に對^シする龍神の冥助である。筆者は、祈誓、およびその結果としての雨・龍神には、請雨の修法とそれにもなう龍王勸請が重ね合わされてゐると考へる。

また、「縁起文」では、八部衆の中の八大龍王は無熱池からやつて来て、「寶石」即ち台座を守護していることが述べられる。副^シ其^{ノカ}宝^{ノカ}石^ニ而^シ左^{ノカ}脇^ニ在^ル龍^{ノカ}穴^ニ。通^ス無^{ノカ}熱^{ノカ}池^ニ。八^{ノカ}大^{ノカ}龍^{ノカ}王^{ノカ}并^シ小^{ノカ}龍^{ノカ}等^ヲ守^ル番^ニ而^シ來^ル在^ル大^{ノカ}聖^{ノカ}左^ニ。近^ク護^ル宝^{ノカ}座^{ノカ}山^{ノカ}内^ニ。遠^ク治^ル王^{ノカ}法^{ノカ}國^{ノカ}土^ニ。

この記述に続く龍穴の描写が、「一山秘密記」等に描かれるところの室生の龍穴を模していることは前稿で指摘済みであるが、ここでいう無熱池の龍王とは善如(善女)龍王のことである。善如龍王は、空海が請雨の際に無熱池(阿耨達池)から勸請した龍王として著名であり、例えば「今昔物語集」巻第十四・四十一「弘法大師、修請雨經法降雨語」では、

今昔、□ 天皇ノ御代ニ、天下早魃シテ、万ノ物皆焼畢テ

枯レ尽タルニ、天皇此レヲ歎キ給フ。大臣以下ノ人民ニ至マデ、此ヲ不歎ズト云フ事無シ。其ノ時ニ、弘法大師ト申ス人在マス。僧都ニテ在シケル時、天皇大師ヲ召テ、仰セ給テ云ク、「何ニシテカ此ノ早魃ヲ止テ、雨ヲ降シテ世ヲ可助キ」ト。大師申テ云ク、「我が法ノ中ニ雨ヲ降ス法有リ」ト。天

皇、「速ニ其ノ法ヲ可修シ」トテ、大師言バニ随テ、神泉ニシテ請雨經ノ法ヲ令修メ給フ。七日ノ法ヲ修スル間、壇ノ右ノ上ニ五尺許ノ蛇出来タリ。見レバ、五寸許ノ蛇ノ金ノ色シタルヲ戴ケリ。暫許有テ、蛇只寄リニ寄来テ池ニ入ヌ。而ルニ、二十人ノ伴僧皆居並タリト云ヘドモ、其ノ中ニ止事無キ伴僧四人ゾ此ノ蛇ヲ見ケル。僧都ハタラ更也。此レヲ見給フニ、一人止事無キ伴僧有テ、僧都ニ申シテ云ク、「此ノ蛇ノ現ゼルハ何ナル相ゾ」ト。僧都答エテ宣ハク、「汝デ不知ズヤ。此ハ天然ニ阿耨達智池ト云フ池有リ。其ノ池ニ住スム善

如龍王、此ノ池ニ通ヒ給フ。然レバ、此ノ法ノ験シ有ラムトテ現ゼル也」ト。而ル間、俄ニ空陰テ戌亥ノ方ヨリ黒キ雲出来テ、雨降ル事世界ニ皆普シ。此ニ依テ、早魃止ヌ。此ヨリ後、天下早魃ノ時ニハ、此ノ大師ノ流ヲ受テ、此ノ法ヲ伝ヘル人ヲ以テ、神泉ニシテ此ノ法ヲ被行ル、也。

と語られる。この空海による神泉苑での請雨譚は、ほかに「遺告二十五箇条」第一条や「弘法大師行状集記」等の空海伝、そして「江談抄」「古事談」「元亨釈書」等にも見える如く広範に流布していた。そして、請雨の際に勧請された龍王は、後には室生の善

如龍王と結び付くことになる。

先に指摘したとおり、「縁起文」は台座の顕現をへ請雨一龍王勧請」と読み換えている。そして、この読み換えは神泉苑請雨譚を重ね合わせるにより保証される。つまり、徳道の祈誓は空海が修した請雨經法の喩なのであった。

二 一山縁起類における神泉苑請雨譚の受容

神泉苑請雨譚は、「縁起文」「密奏記」の成立に大きな影響を与えた一山縁起群の中でも語られている。しかし、内容・記述ともに最も近い関係にあるテクストとして前稿で採り上げた「一山秘密記」には、この説話は登場しない。筆者が確認しえた中世の一山縁起テクストの中では、「一山山記」、および金沢文庫蔵「一山山縁起」に請雨譚が描かれている。本節では、一山縁起の請雨譚の受容について確認する。

「一山山縁起」に見える請雨譚は以下のようなものである。

大師勸請無熱達池龍王、為此山守護。今此龍王者、天長元年旱災時、大師奉勸於神泉苑、令修請雨經法。雖滿七ケ日、雨不降。大師入辺隆定見之、敏大徳呪諸龍、令禁故也。仍出定奏達延二ケ日。令禁日域之諸龍之故、勸請無熱達池善如龍王之処、於神泉池中、金色之小蛇長八寸許、乘長九尺蛇頂、忽然現。是則彼龍赴勸請也。大師御弟子実恵・真濟・真雅・真昭・堅恵・真照等、同見之。於自余人者、雖列座都不見之。通以奏聞之処、少時以勸使和氣真綱、捧幣帛、宝物等被供神龍。而延修之第二

日、雷音響^レ四甘雨忽降池水涌滿^至大壇上^二、三ヶ日夜之間雨沢普潤。大師厭^{サリキ}勸賞^ヲ。今守護龍神是也。

空海が神泉苑で請雨経法を修し、敏大徳（守敏）の妨害に遭つた際、善如龍王を勧請して雨を降らせることに成功した。この時に勧請した龍王こそ、今の室生を守護する龍神である、というものである。『今昔物語集』では触れられなかった守敏との確執が描かれているが、これも神泉苑請雨譚のヴァリエーションのひとつである。

また、『一山記』では、

又神泉園善女龍者、是無熱池龍王之類也。大師勸^レ請之。即金色長八寸許、乘^レ長九尺蛇頂^一來。即実恵・真濟・真雅・堅慧・真曉・真然等見^レ之。同彼山安置^レ之。

と、極めて簡略な叙述となっており、神泉苑という場の表示も省かれ、守敏も登場しない。しかし、「同彼山安置之」と、この龍王を室生の護法神とした点は共通する。

承平七年（九三七）四月二十三日付の大和国解案である「一山年分度者奏状」で、すでに室生の護法神としてその名を記されていた善如龍王は、これらのテクストの中で、空海により無熱池から勧請され室生山を守護する存在へと変貌を遂げたのだ。

次に、『一山秘密記』に目を向けてみよう。このテクストは中世の一山縁起類の中でも最も充実した内容を備えており、また、『一山記』や『一山山傳^{善達法皇}』よりも広く流布したとおぼしく、伝本も圧倒的に多い。そして、前稿で指摘したとおり、『縁起文』『密奏記』もこのテクストから多大な影響を蒙っている。

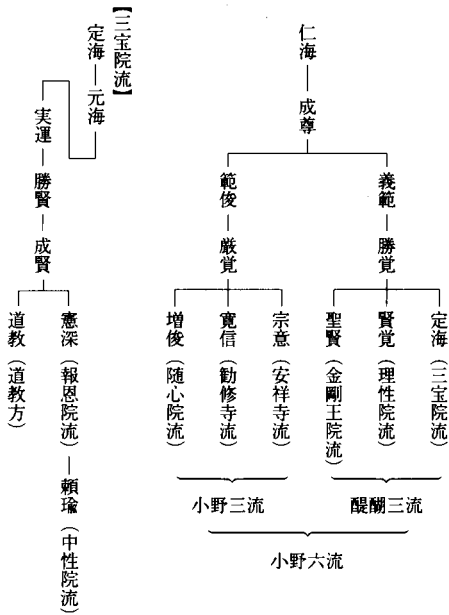
る。しかしながら、この「一山秘密記」では神泉苑請雨譚は排除されているのである。ストーリー展開の面で「一山記」に非常に類似しており、これに新たな要素を加えつつ再構成したと考えても差し支えない内容を持つている。そのうえ空海も登場するのであるが、請雨については触れられていないのだ。その理由は現時点では不明とせざるをえないが、一山縁起類の中に、この説話を収載するものとし兼ねるものが併存しているという事実には留意すべきである。この現象は、次節で述べる東密系口伝における如意宝珠龍王伝授説の消長を反映するものであり、かつ、一山縁起類の背後に広がる口伝の世界を考える際、無視することのできないものだからである。

三 如意宝珠龍王伝授説の重奏

神泉苑請雨譚は、『一山記』や『一山山傳^{善達法皇}』には取り入れられている。「縁起文」は、こうした「一山秘密記」以外の「一山縁起」——縁起に限定することなく、広く、一山をめぐる言説群と言うべきであろうか——から請雨譚を取り込んだのである。だが、請雨譚は種々の空海伝や説話集等にも収載される如く広範に流布していたのであるから、他のルートからの流入ということも一応は想定できる。しかし、前稿で検討したとおり「縁起文」は「一山縁起類からの影響が濃厚であり、たとえ他の請雨譚が「縁起文」作者の知るところであったとしても、「一山縁起」の請雨譚もまた参看されていたはずである。流入経路を想定するならば、「一山関係の言説群である蓋然性は非常に高い。

さらに、この推測を裏付けけるものとして、「如意宝珠龍王伝授説」を挙げることができる。結論から言ってしまうと、龍王が台座を掘り起こしたという「縁起文」の設定は、この、宝珠が龍王より与えられたという説に基づいていると考えられるのだ。このことは前稿でも推測というかたちで示したが、本節では、如意宝珠をめぐる諸説の中で龍王伝授説を概観したうえで、この説の成立と展開の様相、および「縁起文」に取り込まれるに至った道筋を明らかにする。なお参考までに、小野六流および三宝院流の血脈から小稿に関わる部分を抽出し、以下に掲げる。

【小野六流】



六一山縁起類は、例えば「六一山秘密記」が「其峯嶺在二顆之宝珠、号大精進如意宝珠。此铁塔流伝、三国相承靈宝也」とする如く、決まって宝珠の靈威を強調することに配慮しているが、まずは室生に如意宝珠が埋められていることの本説となった『遺告二十五箇条』第二十四条を確認しよう。

大唐大師阿闍梨耶所被付属能作性如意宝珠、載頂渡大日本国、勞龍名山勝地既畢。彼勝地者所謂精進峯土心水師修行之岫東嶺而已。

空海が恵果より付属された宝珠は、室生山精進峯に籠められているというのだ。この記述に後世様々な解釈が施され、宝珠をめぐる種々の説が現れることになる。

『御遺告釈疑抄』は、奥書によると弘長二年（二二六二）に頼瑠（二二二六—一三〇四）が報恩院憲深（二一九二—二二六三）の命により、遍智院成賢（二一六二—二二二二）の目録に「新案之疑問」を加え、憲深の口決に「古抄之義理」を交えて記した、『遺告二十五箇条』に対する注釈書である。右の一文に付された注釈は以下のようなものである。

問、但大唐阿闍梨耶所被付属○勞龍名山勝地既畢。御遺跡云、室生山堅恵法師竹木目底置在如意宝珠、從善女龍王手得。相違如何。答、神仙記云、自唐朝齋如意宝珠、以來我朝。此珠在所並恵果後身、彼宗深所秘也。又善女龍王如意宝珠口伝云、空海和尚於神泉池修請雨經法時、無熱池善女龍王奉空海和尚給。其宝珠大和国仏龍之寺有之。（中略）此等記又左右也。当知大唐

付屬玉、龍王所奉珠、俱以納室生山故、告跡各拳一歟。
或又阿闍梨所持如意珠、即通海中龍王肝頸、而冥會一体
故二文無違耳。御手印縁起合告文。尋云、大師所造如意
珠安置何処耶。答、実賢僧正記云、日本国造宝珠一人、
唯大師・範俊・勝憲三人也。御作宝珠、五指量愛染王、
川院御時、白川円堂壇中心被埋之云。

まず、室生の宝珠は惠果より付屬された／善如龍王より授かつたという二説を挙げ、両説ともに認めている。さらに空海所造の宝珠は白河の円堂に埋められているとも述べられる。都合、三顆の宝珠が存在するというのだ。

このうち、空海が神泉苑での請雨の際に龍王より宝珠を授かつたという説を載せる「善女龍王如意宝珠口伝口授」とほぼ同文のものとして、金沢文庫蔵「善女龍王如心珠并定爪口伝」がある。表題に「酉」とあることより醍醐流の口伝と判断できよう。

善女龍王如心珠口伝

口授云、空水禾尚於神泉池修請雨經水給時、無熱達池善女龍玉來、所持女心玉奉空水禾尚給。其珠、大和国仏龍寺云寺有之。

この口伝は、高野山・心南院尚祚（一二四五）の手になる「御遺告勸註抄」にも、同じく「善女龍王如意宝珠口伝口授云」として引かれる如く、十三世紀前半に、すでに醍醐流の外でも語られていたのであるが、発信源としては、やはり清瀧権現を戴く醍醐を想定するのが妥当であろう。ともあれこの説は、醍醐寺三宝院末流の成賢・憲深・頼瑜も熟知するところであり、それが「御遺

告釈疑抄」に取り入れられたのである。

一方、小野三流ではどうか。勸修寺慈尊院第二世興然（一一二〇～一一〇三）が勸修寺流の口伝を集成した書である「四卷」（一九四）の巻第二を見てみよう。

一 宝珠法在神宗法

此法無種子。部主、宝生尊。種子、奉。宝珠有三種。謂

一 山宝珠・東寺舍利・龍王宝。修時勸請之為本尊。印、宝生尊三昧耶会院也。真言同尊羯磨会真言也。此法号宝珠法。後七日御修法。晦御念誦令修此法也。言避蛇法。是避蛇法者、如意輪法也。

と、宝珠法の説明の中で安祥寺宗意（一〇七四～一一四八）の伝として、一山に埋蔵される宝珠と東寺の舍利、および「龍王宝」を挙げており、「御遺告釈疑抄」の説と在処・来歴が全て一致するわけではないが、その数はやはり三顆と説かれている。ここでいう龍王の宝珠が、後に龍王伝授説へと発展していったのではないだろうか。門屋温氏は伝授説を、「遺告二十五箇条」第一条で述べられる神泉苑の請雨に善如龍王が現れたことと、同じく第二十四条の宝蔵の宝珠と海龍王の頸の宝珠とが通じているという説との結合の所産と解釈しているが、筆者はこれに加え、「東要記」巻中「精進峯」に記される次の記述に注目したい。なお、「東要記」は作者に勸修寺寛信（一〇八五～一一五三）、あるいは随心院親般（一一五一～一二三六）が比定されている。

輻輪聖王持如意珠、雨財穀富饒国土。諸大龍王戴摩尼宝、依珠威徳福力殊勝。往古諸聖、皆為利益群生持無

為宝珠満所求意願。弘法大師亦真言秘家師資相承伝能作宝珠渡我日本国。(中略)遺告云、彼海底玉、常此通能作性宝珠御計親近分レ徳。爰知此大師所持之宝珠、依分レ其徳、彼龍王所持之宝珠、専施其用。方今、弘法大師以真言之加持、与宝珠之力用、能降甘雨成就穀稼。故、非此宝珠無為徳、又彼龍珠何施力用。非彼大龍有勢之威、又此宝珠誰致守護。以之思之、大師宝珠龍王福力、誓約相庇宜得悉地。是以大師為施豊饒於日本国、為任守護於諸龍王、広尋天下之名山、普訪海内之勝地、専ト諸大龍王住在之峯、方掘土心水師修行之岫、結其地界埋此宝珠。是紹隆密教之基、鎮護国家之計也。

転輪聖王と龍王とがそれぞれ持つ宝珠によって福德がもたらされるという思想を、「遺告二十五箇条」に記される空海の宝珠に重ね合わせ、その宝珠を土心水師(堅恵)修行の岫、つまり室生山に埋めたとしているのである。龍王が宝珠を所持するという説が小野三流の口伝に取り入れられ、後に醍醐流の中で伝授説へ発展していったと図式的に捉えるのは危険であろうが、少なくとも伝授説は、ここで述べられるが如き宝珠観をひとつの背景として東密の秘事口伝の世界で成立したであろうことは疑いない。

しかし、後の小野流では龍王伝授説が説かれなくなる傾向にあり、三顆宝珠説も次第に姿を消してゆく。「秘鈔問答」巻第十三・本において頼瑜は、「御遺告釈疑抄」の記述から一転し、この説を採らない立場をとるようになる。

問、宝珠相承何乎。答、先師僧正眞實云、勸修寺習一顆。謂

門葉相承玉是也。精進峯不埋也。彼峯但安置法習也。醍醐寺習二顆。一者惠果相伝玉、在彼峯。二者門葉相伝玉、此玉鳥羽勝光院宝蔵。即大師御作也習也。

勸修寺流では東寺長者が代々伝える宝珠があるのみとされ、醍醐流の説では惠果より相伝のものと同空海所造のものとの二顆が伝わるというのだ。このテクストは、「先師僧正眞實云」としており、「御遺告釈疑抄」の典拠ともなっている惠深の口決の集成である。奥書によると、頼淳に書写させたものを永仁五年(一二九七)から正安二年(二三〇〇)にかけて頼瑜が再治しているとのことであるから、龍王伝授説はその際に削除されたと考ええるべきであろうか。

「御遺告釈疑抄」は成賢の目録にも拠っているということだが、彼の口決を天福元年(一一三三)に道教(一一〇〇、一一二六)が筆記した「遍口鈔」においても、やはり「宝珠三宝院流二果習也」「勸修寺一果習也」の如く、「秘鈔問答」と同じ説が展開されていた。

如意宝珠信仰の中で重要な位置を占める醍醐流、とりわけ三宝院流においては、室生の宝珠をめぐる解釈が極めて重視されていたであろうと推察される。それ故に、様々な説が生み出され、複雑に展開していったのだ。そして一山縁起類からは、こうした口伝の展開の影響を明瞭に読み取ることができる。詳細は別稿に譲るが、例えば「一山記」は「毎日晝住秘印向彼方一經十二品觀之。并白地法可修之。是東寺小野秘伝也」と小野流の秘伝たる修法について記し、また、「一山山傳寺寶法」が三寸不動

と宝珠の相承に関して「有口伝秘法」とする箇所を、「一山秘密記」は、

大師御遺告文云、籠道肝於精進峯、亦本尊海会安彼岫。
道肝者今伝法密印事也。本尊者即今宝珠并不動・愛染等铁塔
流伝一仏二明王者是也。

と、「遺告二十五箇条」をめぐる秘説という形で解き明かす如くである。

一山縁起類生成の背景には、先に見た龍王伝説の展開と消長の様相も当然に想定される。三種の一山縁起テクストのいずれにも伝説は採られていないが、「一山記」と「一山山秘密記」^註とが神泉苑請雨譚を収載し、「一山山秘密記」にはそれがな^註いという現象は、あるいは、請雨譚とともに語られることのも多かった伝説の衰退してゆく様相の一端を反映しているのではな^註からうか。

「縁起文」はその成立に際して、一山縁起類だけではなく、それを生み出した原動力のひとつである口伝類との交差があったと考えられよう。筆者は前稿で、「善如龍王から如意宝珠を授かつたという説を「縁起文」に重ね合わせてみると、徳道に台座の在処を教えたのが八大龍王を含む天龍八部衆であることも響き合う」と述べたが、龍王伝説はこうした口伝の展開という「回路」から「縁起文」に流れ込み、台座に室生の宝珠と同等の威光を付与するのに一役買ったのである。

四 如意宝珠・十一面観音自体説

最後に、この宝珠から台座への書き換えに関して若干の推測を

付け加えるべく、「七箇秘法」をめぐる口伝を採り上げてみたい。¹⁵⁾

元亨元年（一三二二）の殊音（文観）の奥書を有し、「遺告二十五箇条」に纏わる三宝院流の秘説を伝える「御遺告七箇大事」というテクストでは、灌頂・如意宝珠・後七日御修法・晦御念誦・後夜念誦法・奥砂子平法・二間観音供の七つが「大事」として挙げられており、これらはともに如意宝珠法・法に通ずるという。この中で、第七の二間観音供に関して、「秘伝云、此法ハ朱法一體故、就御遺告ニ習之。本尊異説有之。一十二面、左右梵天・帝釈随從」と、宝珠法と一体である二間観音供の本尊として十一面観音を用いることがあると説く。

また、勸修寺流の秘説を伝え、後には他流でも書写された「御遺告七箇秘法」¹⁶⁾によれば、七箇秘法とは晦御念誦・後七日御修法・後夜念誦・十八日観音供・如意宝珠法・避蛇法・奥砂子平法のことであり、やはり全てが如意宝珠法と関わる。この中で、「遺告二十五箇条」第二十五条の、

夫以昔南天竺國有一凶婆・一非欄等、破是密華蘭。爾時華蘭門徒之中有一強信者。修奥砂子平法。七箇日夜、弥亦次々修具度者、彼凶婆等自退為密華蘭安寂也。是以末世阿闍梨耶、宜知是自由、必心勤守彼法呂。彼法呂者在入室弟子一山精進嶺土心水師之竹木日底。

という記述を本説とする奥砂子平法は、「御遺告七箇秘法」では「奥砂子平法呂本尊種々習、宝珠法調伏行也」と説かれている。この修法の本尊は十一面観音、さらには天照大神と説かれることがあり、金沢文庫蔵「伊勢大神宮御体」（南北朝写）に「天照大神秘事」¹⁷⁾ 奥沙本尊者天照大神也。大神者日輪十一面也」と、ま

た真福寺藏「日本記三輪流」(天文十七年(一五四八)写)に「天照大神者奥砂子本尊也。大日・観音者二者合成十一面義也」と見え

る。これらの所説が「縁起文」「密奏記」の成立時期まで遡れるか否か即断はできないが、特に奥砂子平法をめぐる秘説は、「密奏記」で天照大神の化身である貴女が唱えた偈、

我本秘密大日尊

大日日輪観世音

観音応化日天子

日天権跡名日神

此界能救大慈心

所以示現観世音

と何らかの脈絡が見いだせそうであり、このことから東密系口伝・長谷寺縁起と神祇説との交渉を想定することも可能であろう。

しかし、それ以上に注目すべきは、十一面観音・天照大神が二面観音供や奥砂子平法——即ち如意宝珠法——の本尊とされる点である。一山をめぐる言説群に現れる宝珠を「縁起文」が十一面観音の台座と改め、また「密奏記」では、「一山秘密記」で「宝珠二天照大神」とされていた関係が「十一面観音二天照大神」となっている。こうした「宝珠一十一面観音(台座)」の書き換えは、単に長谷寺の本尊を権威付けるための一回性の解釈と見るのではなく、背景に、こうした秘事口伝の存在を積極的に想定すべきではないだろうか。¹⁶⁾

*

筆者は前稿で、「一山秘密記」と「縁起文」とは、語句レヴェルでも重なる箇所が多いうえに、室生にとつての宝珠と初瀬

における台座とが、その重要性という点で同等の位置付けをされており、記述・設定の面から「一山秘密記」を「縁起文」の典拠とみなして差し支えないと述べた。そして、「縁起文」と対のテクストである「密奏記」に関しても、仏法弘通のために天の岩戸を開いた天照大神という設定は、宝珠の垂迹である天照大神が岩戸を開いて室生に現れたことの焼き直しであり、さらには「一山記」や「一山山山王秘密記」の「手力雄二俱利迦羅龍王」という関係を重ねると、八大龍王が台座を掘り起こしたとする「縁起文」と、手力雄が徳道を天照大神の本地である十一面観音へと導いた「密奏記」とが繋がりが、両テクストともに複数の一山縁起の影響を受けていることを指摘した。そして、一山の縁起テクストに現れるものではないが、「御遺告釈疑抄」等に採られている龍王伝授説を挙げ、この説さえ「縁起文」の「読み」に還元することが可能であることを示し、東密における一山の宝珠・龍王をめぐる言説群の展開と、「縁起文」「密奏記」の成立との間に何らかの交渉があったであろうことを推測したのである。

それらを踏まえて小稿では、「一山記」や「一山山山王秘密記」に見え、「一山秘密記」では採られていない空海神泉苑請雨譚に注目し、これが「縁起文」の台座顕現の場面から読み取れることより、「一山秘密記」だけでなく、複数の一山縁起からの影響を想定することの必要性を再確認した。さらに、一山縁起類では語られることのない如意宝珠龍王伝授説をめぐる言説が東密系口伝の世界で多様に展開していたことより、必ずしも「縁起」という体裁をとるテクストだけに限定することなく、一山について語る種々の言説群をも視野に入れなければ、「縁起文」

の成立と「一山」との関わりを論ずることは不可能であるという提言をし、一例として、如意宝珠・十一面観音同体説を挙げた。

東密における秘事口伝は極めて複雑な展開相を呈し、こと「一山」に関するものに限っただけでも簡単に論じられるものではない。そうした動きの中で「一山」の縁起を語るテキスト群が生成してゆく。しかし、口伝の展開のひとつの所産である縁起テキストだけに拘泥せず、その背後の多種多様な言説群の存在を視野に入れることの必要性は、いま指摘したとおりである。「一山」縁起とは、こうした言説群の展開の「ある局面」が投影されたテキストであり、これらの持つ意味は甚だ大きいのであるが、「縁起文」「密奏記」の成立を論ずるにあたって、「一山」縁起」という形態で偶然に残されたものだけを典拠に据えて論を進めてゆくのは、きわめて危険であるといえよう。

また、「縁起文」「密奏記」の記述のうち、小稿で採り上げた箇所以外にも東密系口伝の影響は十分に想定しうる。単に「密教的」あるいは「両部神道的」等と断ずるのはたやすいが、そういった「宗教色」を縁起テキストにもたらしたものが、そういなければならないと考える。これは、「縁起文」「密奏記」の宗教的な位相や、あるいはまた生成の「場」というものを検討する際、避けては通れない問題である。「一山」縁起類、およびその後にある口伝類も、こうした研究を進めてゆくに当たり無視することのできない存在なのである。

注(1) 国文学研究130/平成12・3。以下、「前稿」とする場合はこの稿を指す。

(2) 長谷寺縁起群の展開相については、藤巻「長谷寺の縁起—再生産と変容の様相—」(解釈と鑑賞63・12/平成10・12)参照。

(3) なお、「新たな要素」のうち、前稿で考察の対象から外した台座が地下で天竺や補陀落山と繋がっているというモチーフについては、橋本正俊氏「観音寺院縁起の展開—「古老伝」等の記述をめぐって—」(国語国文69・2/平成12・2)参照。古老の口伝として語られていた伝承が縁起体系に取り込まれてゆく様相が論じられる。ただし、ここでいう「口伝」は筆者が小稿で扱う「口伝」とは異なるものである。

(4) 連日出典氏「中世に於ける室生山内の変質」(室生寺史の研究—敝南堂書店/昭和54・11/初出は昭和40)によると、興福寺系の創建勢力が「興福寺—春日—室生」という系譜を作成したのに対抗し、後に室生寺に流入した東密勢力は、いま引用した「今昔物語集」の説話と、この前話である「弘法大師、挑修円僧都語」で語られる空海・修円(守敏)の修法争いの説話とを結び付け、神泉苑の請雨において空海が興福寺賢環の弟子である守敏を退けたことにしたという。東密勢力によって作りあげられたこの系譜が、後に、「空海が無熱池から神泉苑に勧請した龍王」と「室生の龍王」とを結び付ける原動力となるのである。

(5) 「縁起文」の台座顕現は天平元年(七二九)に設定されており、空海出生以前であるため、空海の名が「縁起文」に現れることはない。飽くまで、重ね合わせているのみである。

(6) 筆者は「一山」記「一山」山縁起「一山」山秘密記を、「一山」山縁起の呼称のもと一括して扱う。これらのテキストは東密の中で「一山」をめぐる種々の秘事口伝が生み出されていった動きと即応し、それらを収載して成立したとおぼしい。その点で、一般的な「縁起」とは一線を画するものである。しかしそうした口伝等を利用して、室生が日本の、そして密教の本源たることを説いていることより、真言寺院室生寺の「縁起」を語るものとして機能しているテキストと考えられるからである。

(7) 『今昔物語集』の二話を融合させたものとして遠氏注(4)論文で示される『元亨釈書』巻第一九「金剛峯空海」に見える諸雨譚と同じタイプである。その他、「弘法大師行状集記」天長元年条、「古事談」巻第三、「三國伝記」巻第三等にも見える。

(8) 藤巻「室生の如意宝珠——東密諸流派における秘事口伝の展開と一山縁起——」(中世文学会平成十二年度春季大会・口頭発表／平成12・5)で、「一山縁起群の展開の様相を『一山秘密記』を中心に論じた。近稿を予定している。

(9) 『野沢大血脈』(「東寺真言宗血脈」等を基に作成。

(10) 巻下の奥書に「弘長二年之曆青陽三月之候、忝承・師長之命懸馳資短之筆。仍遍智院目錄爲本、加以新案之疑問、報恩院口決爲宗、助以古抄之義理。愚記有「世縁歎、賢覽加「判定」。三宝院末資頼瑠記」とある。

(11) 門屋温氏「一山土心水師」をめぐって(『説話文学研究32』／平成9・6)。

(12) 長谷宝秀氏は「東要記」を「弘法大師伝全集」2(六六新報社／昭和9・7)に収めるに当たり、崇徳院を「今上」とすることや「西院流八結」がこれを引き「東要記」と表記している点などから、寛信説を採る。一方、親殿説は奥書に「承久元年九月十九日、以唐橋御本・書写校合了」とあることによる。

(13) 巻第十一・末の奥書に「永仁五年八月二十六日、加点了。金剛資頼瑠」と、また巻第一の奥書に「当初雖「記抄」未「再治」。故正安二年二月中旬、勸加重治定畢。法印頼瑠」とある。

(14) 七箇秘法と一山との関わりについては、稿を改め詳細な検討を行う予定である。

(15) 智積院蔵本の相承次第には、醍醐寺金剛王院流の勝尊が伝えた本を寛元四年(一二四六)に行恵が書写したことが記されており、この頃すでに勸修寺流以外にも伝わっていたことが知れる。また、阿部泰郎氏「宝珠と王権——中世王権と密教儀礼——」(『岩波講座 東洋思想』16／岩波書店／平成1・3)によれば、醍醐寺蔵「七箇

秘決」も同じく勸修寺流の伝える七箇秘法について記すものであり、こちらは報恩院流が伝えたという。

(16) その他、例えば勸修寺流良勝方や仁和寺御流を受けた菩提院了遍(一二三四・一三一一)の名が相承次第に見える金沢文庫蔵「大神宮一長谷秘決」では、「伊勢靈鏡・一山・一山・長谷頭光、同是・一山・今印明大事也」と、宝珠を媒介に伊勢・一山・長谷寺が結び付けられている。十二面観音と宝珠、あるいは長谷寺と一山との思想的結合を裏付ける教説的な根拠は少なくない。

「底本」『長谷寺縁起文』→長谷寺豊山文庫蔵・室町末期写本(国文学研究資料館マイクログラフ資料)／対校本→同文庫蔵・寛文十年写本(同前)・松平文庫蔵・群書類従・大日本仏教全書等。『長谷寺密奏記』→金沢文庫蔵／対校本→長谷寺文書(東京大学史料編纂所影写本)・尊経閣文庫蔵・内閣文庫蔵・成實堂文庫蔵。「一山記」→宮内庁書陵部蔵「統群書類従」写本(国文学研究資料館マイクログラフ資料)／対校本→統群書類従(活字本)・大日本仏教全書(「一山秘記」)。「一山」山名→金沢文庫蔵(323・110)／対校本→同蔵(35・13)。「一山秘密記」→随心院蔵／対校本→彦根城博物館蔵(国文学研究資料館マイクログラフ資料)・善通寺蔵(同前、大正大学蔵等)。「諸寺建立次第」→「建久御遺札記」／校刊美術史料。「今昔物語集」→新日本古典文学大系。「遺告二十五箇条」→「東要記」→弘法大師伝全集。「善女龍玉如心・珠并足爪口伝」→「伊勢大神宮御体」→大神宮一山長谷秘決」→金沢文庫蔵。「四卷」→「秘鈔問答」→「遍口鈔」→大正新脩大藏經。「御遺告釈疑抄」→「御遺告勘註抄」→統真言宗全書。「御遺告七箇秘法」→「御遺告七箇大事」→智積院智山書庫蔵。「日本記三輪流」→真福寺善本叢刊。

「付記」小稿は、平成十二年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。